



日本HPHネットワーク

Japan Network of Health Promoting
Hospitals & Health Services



International Network of
Health Promoting Hospitals
& Health Services

第7回 J-HPH カンファレンス 2022 ポスターセッション 抄録集

ポスターセッション掲載期間
2022年 11月 11日(金)~12月 27日(火)

第7回 J-HPH カンファレンス 2022(ハイブリッド開催)
2022年 11月 12日(土)13:00-17:00~11月 13日(日)8:30-13:00

日本 HPH ネットワーク
Japan Network of Health Promoting Hospitals & Health Services(J-HPH)

演題テーマ

1. 患者に対するヘルスプロモーションの実践
 - ①禁煙、飲酒、運動、食事
 - ②肥満、高血圧、糖尿病
 - ③その他
- 2.健康なまちづくり
 - ④ 地域の交流活動(よろず相談所、カフェなど)
 - ⑤ 地域での介護予防、体操教室の実践
 - ⑥ 認知症予防活動
 - ⑦ 市民と協力した地域での健康づくり活動
 - ⑧ その他
3. 健康な職場づくり
 - ⑨ メンタルヘルス対策
 - ⑩ 腰痛対策(ノーリフト)
 - ⑪ 働き方改革
 - ⑫ その他
4. 健康な学校、家庭づくり
 - ⑬ 健康な学校、家庭づくり
5. SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動
 - ⑭ 診療現場における SDH に対する実践
 - ⑮ 子どもの貧困対策の実践(無料塾など)
 - ⑯ 貧困対策としての無料低額診療と HPH
 - ⑰ 外国人、難民に対する活動
 - ⑱ 気候変動に対する活動(グリーンホスピタルの実践など)
 - ⑲ 平和とヘルスプロモーション
 - ⑳ その他
6. 医療の質の向上とヘルスプロモーション活動の「見える化」
 - ㉑ 自己評価マニュアルの活用
 - ㉒ ヘルスプロモーションのパス作製
 - ㉓ ヘルスプロモーションと QI
7. その他
 - ㉔ ヘルスプロモーションを担う人づくり、教育
 - ㉕ HPH のための管理運営
 - ㉖ その他

目次

報告種別	演題名／法人事業所名 氏名	ページ
研究報告	低強度ストレッチ・レジスタンス運動が糖尿病患者の血糖値に及ぼす影響 ～影響の強い要因について～ 公益財団法人 宮城厚生協会 坂総合病院 咲間 優	5
実践報告	アルコール依存症により骨折を繰り返す患者の生活背景を捉えた看護 福岡医療団 千鳥橋病院 山下 恵	5
実践報告	「HPH&SDH問診票」の必要性 東京保健生活協同組合 本部 小西 艶子	6
実践報告	次月案内に込めた思い～ACPにつながる取り組み～ 愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院 角藤 未栄	7
実践報告	当院利用者を対象とした情報発信の実践 広島医療生活協同組合 広島共立病院 牧 尚美	7
実践報告	地域に安心のつながりをつくる!『不用品交換市』 愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院 山本 伊勢美	8
実践報告	公園を歩き始めて 17 年 愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院 村上 信弘	8
実践報告	当院におけるコロナ禍での HPH 活動～健康チャレンジについて 医療法人道南勤労者医療協会 函館稜北病院 笠原 毅	9
研究報告	医療生協の班会への参加が要支援・要介護リスクの悪化を抑制するか -2018-2022 縦断研究- 横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻 金子 惇	9
研究報告	医療福祉生協の班会活動への参加と健康因子及び要介護認定の関連: 前向きコホート研究より 東京保健生活協同組合 大泉生協病院 斎藤 文洋	10
実践報告	医療機関の地域診断学習会から区内全体の食支援活動へ ～つなぐ・に～よん食支援チームの取り組み～ 大阪市西淀川区医師会 在宅医療・介護連携相談支援室 大中 湖月	10
実践報告	心理職らで行なう新入職員メンタルヘルスケアの実践報告 —当法人における過去 4 年間のデータから— 鳥取医療生活協同組合 鳥取生協病院 今北 哲平	11
実践報告	コロナ禍におけるピアサポートの必要性 広島医療生活協同組合 広島共立病院 富岡 祐美	11

報告種別	演題名／法人事業所名 氏名	ページ
実践報告	健康的な職場づくり 広島医療生活協同組合 広島共立病院 竹岡 志保	12
研究報告	「ありがとうポスト」によるポジティブアプローチが職員に与える効果について 公益社団法人京都保健会 京都協立病院 玉木 千里	12
研究報告	HPH 活動が職員の喫煙率や喫煙防止の意識に及ぼす効果 淀川勤労者厚生協会 千北診療所 野口 愛	13
研究報告	職員をとした「体重日記」による体重管理に及ぼす研究 倉敷医療生活協同組合 水島協同病院 高田 智恵美	14
実践報告	HPH 委員会 ニュース発信で HPH 活動をより豊かに 淀川勤労者厚生協会ファミリークリニックあい 大西 暁子	15
実践報告	HPH 活動の見える化を目指して 倉敷医療生活協同組合 水島協同病院 大室 里美	15
実践報告	保健師によるブリーフ・インターベンションを用いた飲酒・喫煙の取り組み 倉敷医療生活協同組合 水島協同病院 井上 佳恵	16
実践報告	親子ホームレスに対しての社会的支援を行って 公益社団法人福岡医療団 千鳥橋病院 湊崎 加代子	16
実践報告	届かぬ公助～ソーシャルワーカー介入事例から～ 津軽保健生活協同組合 サポートセンター 工藤 聡子	17
研究報告	無料低額診療事業利用者の実態～レジストリ研究の中間集計～ 大阪医科薬科大学/しが健康医療生活協同組合 大阪医科薬科大学/こびらい生協診療所 西澤 寛貴	18
研究報告	無料低額診療制度を利用する外来患者のコロナ禍における生活実態調査 ～コロナ前との比較～ 公益社団法人京都保健会 上京診療所 若田 哲史	18
実践報告	院内での「やさしい日本語ワークショップ開催」 社会医療法人同仁会 耳原総合病院 角野 佳奈子	19
実践報告	国籍や宗教上の制約(禁止食品)に迅速な対応を行う 公益社団法人 福岡医療団 千鳥橋病院 中嶋 純子	19
実践報告	診療所における Green Practice の取り組み しが健康医療生活協同組合 医療生協こうせい駅前診療所 佐々木 隆史	20
実践報告	当院における包括的ヘルスプロモーションの実践 倉敷医療生活協同組合 総合病院水島協同病院 石部 洋一	20

報告種別 演題名／法人事業所名 氏名	ページ
実践報告 フードパントリーを通じた見守りづくり 東京保健生活協同組合 本部 斎藤 恵子	21
実践報告 フードバンクの取り組み 東京保健生活協同組合 本部 香取 三恵子	21
研究報告 AIによるデータドリブンな仮説生成を導入した新たな疫学研究の可能性 大阪公立大学 農学部緑地環境科学科 大塚 芳嵩	22
実践報告 新型コロナ禍における糖尿病合併症診療の自己監査 公益社団法人京都保健会 ふくちやま協立診療所 寺本 敬一	22
実践報告 QRコード・グーグルフォームを用いた HPH 活動報告の取り組み 一般社団法人 大阪ファルマプラン 本部 橋本 一代	23
研究報告 Health Promoting Hospitals -医療機関等におけるヘルスプロモーション活動の 実態調査報告 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 医療経済学分野 本田 雄大	23
研究報告 医療機関のヘルスプロモーション活動の実際と普及に向けた課題・対策 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 西下 陽子	24
実践報告 リハビリテーション科における SDH の取り組みについて ～SDH の取り組みの変遷と成果,今後の展望について～ 津軽保健生活協同組合 健生病院 小山内 奈津美	24
実践報告 HPH 産婦人科に勤務する助産師が取り組む性教育～オンライン開催による活動再開～ 医療生協さいたま 埼玉協同病院 村井 佳美	25
実践報告 地域で繋がり、顔の見えるまちづくりの実現 医療生協さいたま生活協同組合 深谷生協訪問看護ステーション 永躰千春	25

□ 研究報告

1-1 患者に関するヘルスプロモーションの実践
禁煙・飲酒、運動、食事

低強度ストレッチ・レジスタンス運動が糖尿病患者の血糖値に及ぼす影響～影響の強い要因について～

宮城県・公益財団法人 宮城厚生協会 坂総合病院
地域健康課

発表者：咲間 優／その他

共同研究者：盛口雅美（坂総合病院 糖尿病代謝科）、高橋美琴（坂総合病院 糖尿病代謝科）、大野真理恵（坂総合病院 糖尿病代謝科）、内藤孝（坂総合病院 糖尿病代謝科）、沖本久志（坂総合病院 糖尿病代謝科）

キーワード：糖尿病患者、低強度運動、血糖値

【目的】低強度運動の血糖降下作用については十分検証されていない。本研究では、椅子座位で行う低強度運動が血糖値に及ぼす影響を検討した。

【対象】糖尿病患者 1,166 名(平均年齢 62.4 歳)。

【方法】昼食後 120 分前後の時間帯に運動を開始、その後 60 分程度の運動時間を設定、運動前後の血糖値変化や、対象者特性による影響を比較した。

【結果】平均血糖値が 194.9 mg/dl から 185.4 mg/dl へ有意に低下した。運動後値へ影響を及ぼす説明変数には、運動前値、BMI、薬剤分類、性別、四季分類が選択された。

【結論】低強度運動の前後に血糖低下が確認できた。また様々な要因が絡み合っており、運動後値に影響を及ぼしていた。

【お問い合わせ】

宮城厚生協会、坂総合病院 地域健康課
咲間 優

E-mail：yu-saku@zmkk.org

□ 実践報告

1-1 患者に関するヘルスプロモーションの実践
禁煙・飲酒、運動、食事

アルコール依存症により骨折を繰り返す患者の生活背景を捉えた看護

福岡県・福岡医療団 千鳥橋病院

発表者：山下 恵／看護師

共同研究者：藤原可南子、脇山さお理

キーワード：アルコール依存症、生活背景、手術

目的)A 氏は独居でアルコール依存症があり治療には消極的である。精神的に不安定で転倒骨折を繰り返し健康的な生活維持が困難であった。A 氏の生活背景を捉え患者の退院後の生活について考え多職種との連携・役割・術前・術後看護や今後の看護実践に活かしていく。

方法)カルテ・問診・術前・術後訪問等により情報収集・考察した。

事例) A 氏 70 歳代 女性 ADL 杖歩行 在宅独居

診断：左大腿骨転子部骨折/左骨折観血の手術

既往：右大腿骨頸部骨折、アルコール精神病、右上腕骨骨幹部骨折

病歴：自宅のトイレで転倒し救急要請。栄養状態 TP5.4 AI b2.7

飲酒：酎ハイ 3 杯/日 食生活：朝食はバナナ、牛乳、野菜ジュース。昼食はなし。夕食はコンビニ食、飲酒のおつまみ程度。飲酒は午前 10 時から飲み始め夕食時まで継続。

介護保険：要介護 1。ヘルパーは本人拒否

結果)手術は問題なく終了。術後訪問し本人の想いを傾聴した。飲酒に関して「やめたいけどやめられもんね」「もう入院したくないからお酒は飲まない」との発言があった。食事に関して「鶏肉使わない簡単な作れる栄養とれるもの教えて欲しいな」とのことで栄養師へ情報提供した。MSW より在宅復帰支援と退院指導を行ったが、地域コミュニティの利用は拒否。考察) A 氏は断酒の意志はある。しかし自覚が足りず飲酒し骨折をしている。独居のため周りに援助者がいないことも断酒できない原因である。飲酒生活が 10 年以上続き、日中活動が少なく生活リズムが崩れている。アルコールのリスクを認識してもらうこと、

日中の活動を増やし生活リズムを改善すること、栄養士・MSW と情報の共有し指導していくことが必要である。アルコール外来に繋げることで、アルコールに対する知識を持ち、食生活の見直し改善に繋がった。また栄養士・MSW と情報共有し指導した。生活リズムを変えるため地域コミュニティーを推奨したが拒否された。退院後飲酒する可能性があり、指導の検討と継続した支援が必要であり、多職種と連携しつつ必要な看護や支援を提供していくことが重要である。

【おわりに】手術室看護師は術中看護が中心で、術前・術後看護の中で生活背景を捉え介入する場面が少ない。患者の背景と退院後の生活について考え、在宅復帰する過程での多職種連携の重要性を知ることができた。今回学びと実践を今後の看護実践に活かしたい。

【お問い合わせ】

福岡医療団、千鳥橋病院

山下 恵

[E-mail:mg-yamashita@fid.jp](mailto:mg-yamashita@fid.jp)

□ 実践報告

1-1 患者に関するヘルスプロモーションの実践
その他

「HPH&SDH問診票」の必要性

東京都・東京保健生活協同組合 本部

発表者：小西 艶子／管理栄養士

キーワード： 孤立、社会的処方、職員教育

【背景】コロナ感染拡大により、人とつながることが難しい環境。また、高齢化が進む中、都心では独居や高齢者2人暮らしが増え、近所で「付き合いがない」人の割合が増えている

【方法】「HPH&SDH 問診票」を改正。他部門と協力して電子カルテに導入。「誰一人取り残さない公正な社会」を第8次中期構想に掲げ、問診票を活用し「困りごとのキャッチ、SDHの解決」を年度方針としている。

【結果】①労力がかかるなどで活用不十分。特に外来は発熱者への対応に追われた。②年度方針とすることと看護部の介入によりSDH項目の患者の相談が組織部に入り、地域につながった事例が複数。

【考察】事業所でSDHを早期に発見し、解決するために問診票の活用が重要

【お問い合わせ】

東京保健生活協同組合 本部

小西 艶子

[E-mail: t-konishi@tokyo-health.coop](mailto:t-konishi@tokyo-health.coop)

□ 実践報告

1-1 患者に関するヘルスプロモーションの実践
その他

次月案内に込めた思い～ACPにつながる取り組み～

愛媛県・愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

発表者：角藤 未栄／看護師

共同研究者：宇高サユリ（愛媛生協病院）、
坂本真弓（愛媛生協病院）、篠浦さゆり（愛媛生協
病院）、近藤温美（愛媛生協病院）

キーワード： ACP、訪問診療、次月案内表

次月案内に込めた思い～ACPにつながる取り組み

「目的」：長い人生の集大成 もっと生き生きと過
ごしてほしい 在宅診療でできることを実行したい

「方法」：ACP を充実させる居場所づくり

①正しい医療の選択が適切に行われる 受けたくない
医療をうけないように自身の身体を知っておく必要
がある②自身の状況をだれかに伝える 相談できる
相手がいる 医療を上手に活用できる いろんな
情報を知っている相談先がわかる かかりつけ医の
存在③あなたのことを知りたい 私のことを知って
もらいたい一緒に生活を紡ぎたい

「結果」：ACP なしー近親者の代弁 救命優先 ACP
ありー本人の意思 QOL 優先

「考察」：訪問診療での関りを通じて居場所を作る
お手伝いはできる

【お問い合わせ】

愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

大西 壽美子

E-mail:seikyo@ehime-med.org

□ 実践報告

1-2 患者に対するヘルスプロモーションの実践
その他

当院利用者を対象とした情報発信の実践

広島県・広島医療生活協同組合 広島共立病院

発表者：牧 尚美／保健師

共同研究者：池田久美、吉田優子、下森真由美、
小村郁美、今岡知佳、遠藤真実

キーワード： COVID-19、情報発信、ヘルスプロモー
ション

目的：COVID-19 の感染拡大に伴い、病院利用者から
生活や健康に対する不安の声を聞く機会が増えたた
め、利用者の生活の一助となることを目的に情報発
信を行った。

対象者：当院外来・健診センター利用者

期間：2021年6月～2022年3月

方法：チラシを作成し掲示・配置した

・掲示場所：外来・健診センター

・配置場所：外来総合受付前

・内容：予防接種、マスク、運動不足解消の3つのテ
ーマで作成

結果・考察：COVID-19 に関して様々な情報が錯乱し
ている中、正しい情報発信を行うことができた。しか
し、利用者の反応を評価する手段がなく客観的評価
はできなかった。

今後は、評価可能な実践方法を検討し、対象者のニー
ズを把握しそれに沿った内容の提供を行う。

【お問い合わせ】

広島医療生活協同組合 広島共立病院

牧 尚美

E-mail:health@hiroshimairyu.or.jp

□ 実践報告

2-4 健康なまちづくり 地域の交流活動
(よろず相談所、カフェなど)

地域に安心のつながりをつくる! 『不用品交換市』

愛媛県・愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

発表者：山本 伊勢美/その他

共同研究者：桑原北支部運営委員会

キーワード：不用品交換、人と人のつながり、安心の居場所

月1回の「不用品交換市」が支部の健康づくりの場に加わり、「毎月ここに来て話ができるのが楽しみ」という参加者を広げ、場を運営している担い手のみんなのやりがいにつながっている。人と人がつながる場ができれば、「安心の居場所」になる、医療生協の地域活動の魅力がここにある。

【お問い合わせ】

愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

山本 伊勢美

E-mail: n-hayashi@ehime-med.org

□ 実践報告

2-4 健康なまちづくり 地域の交流活動
(よろず相談所、カフェなど)

公園を歩き始めて17年

愛媛県・愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

発表者：村上 信弘/その他

共同研究者：みなみ久米支部運営委員会、愛媛生協病院地域事業課

キーワード：継続、会話、つながり

近くの公園を利用して、毎日夕方、気の合う仲間が集う活動をして17年になりました。みんなが集まって一緒に歩き、お話をすることで元気になる場になっています。

【お問い合わせ】

愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院

村上 信弘

E-mail: n-hayashi@ehime-med.org

□ 実践報告

2-5 健康なまちづくり 地域での介護予防、体操教室の実践

当院におけるコロナ禍での HPH 活動～健康チャレンジについて

北海道・医療法人道南勤労者医療協会 函館稜北病院
発表者：笠原 毅／理学療法士

共同研究者：佐々木悟(函館稜北病院) 近藤忠幸(函館稜北病院) 彦野芳樹(函館稜北病院)

キーワード： コロナ禍 高齢者 フレイル予防

2020年3月に世界保健機関(WHO)によるパンデミック宣言、同年4月には第1回目の緊急事態宣言が発出され、活動自粛が呼びかけられ、2年半が経過した。コロナ禍での活動量の低下は各地で報告されており、特に高齢者のフレイルへの介入は重要である。

函館稜北病院のHPH委員会では、感染状況に合わせながら、感染対策とフレイル予防を両立できないか工夫しながら地域の健康増進に取り組んできた。個々で行える「健康チャレンジ」や病院周辺の歩行マップの作成、また、少数での医療懇談会やホームページにも医療懇談会の動画を掲載した。感染状況やその人の状況に合わせてながら選択できるツールを準備し地域に根差した予防活動を今後も行っていきたい。

【お問い合わせ】

医療法人道南勤労者医療協会 函館稜北病院

笠原 毅

E-mail: t-kasahara@donank.jp

□ 研究報告

2-5 健康なまちづくり 地域での介護予防、体操教室の実践

医療生協の班会への参加が要支援・要介護リスクの悪化を抑制するか -2018-2022 縦断研究-

神奈川県・横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻

発表者：金子 惇／医師

共同研究者：齋藤文洋(東京保健生活協同組合 大泉生協病院院)、原穂高(愛媛医療生活協同組合 愛媛生協病院)、本村 隆子(鹿児島医療生活協同組合 看護部)、丸山 久美子(医療生活協同組合 さいたま生活協同組合)、岡本 由美子(岡山医療生活協同組合)、今井好一(日本医療福祉生活協同組合連合会)、栗林久子(日本医療福祉生活協同組合連合会)、近藤克則(千葉大学 予防医学センター 社会予防医学研究部門・国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部)

キーワード： 通いの場、介護認定、班会

目的：医療生協の通いの場である班会の参加年数・頻度が要支援・要介護リスク評価尺度に関連するかを検証した。

方法：2018年及び2022年に同一の対象者に質問紙調査を行った縦断研究である。日本全国の医療生協会員に対し、2018年の班会参加年数・頻度を曝露、2022年のリスク尺度をアウトカム、2018年のリスク尺度(性別、年齢含む)、教育歴、所得、抑うつ、喫煙、独居、就労を調整した線形回帰分析を行った。

結果：回答者2657人のうち欠測がない1412人を対象とした。参加年数については回帰係数:-0.65 (-1.47 to 0.16)、後期高齢者:-1.57 (-2.84 to -0.64)、参加頻度:-0.54(-1.45 to 0.36)、後期高齢者:-1.6 (-3.01 to -0.19)であった。

考察：後期高齢者においては班会参加群で、4年後のリスク尺度の改善を認めた。

【お問い合わせ】

横浜市立大学 大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻

金子 惇

E-mail: kanekom@yokohama-cu.ac.jp

□ 研究報告

2-8 健康づくり その他

医療福祉生協の班会活動への参加と健康因子及び
要介護認定の関連:前向きコホート研究より

東京都・東京保健生活協同組合 大泉生協病院

発表者: 斎藤 文洋/医師

共同研究者: 金子 惇 1,3、原 穂高 1,4、本村 隆子 1,5、丸山久美子 1,6、岡本由美子 1,7、栗林 久子 1、今井好一 1、近藤克則 8,9

1 日本医療福祉生活協同組合連合会、2 横浜市立大学学術院医学群 大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス、3 愛媛医療生活協同組合、4 鹿児島医療生活協同組合、5 医療生協さいたま生活協同組合、6 岡山医療生活協同組合、7 千葉大学予防医学センター社会予防医学研究部門 8 国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター老年学評価研究部

キーワード: 老年うつ病評価尺度、主観的健康感、班会

「目的」医療福祉生協が行う班会への参加と抑うつとの関連を検証。

「方法」前回調査で回答を得た 3273 名を対象にアンケート調査。コロナウイルス感染症パンデミックによる自粛の状況も調査。

「結果」

アンケート回収 3272 名中 2359 名、対象外判定となった 794 名を含め補足率 98%。

2018 年 GDS 点数中央値 2.0、平均値 2.16、2022 年中央値 2.0、平均値 2.51 で分布が高得点側にシフト、統計学的にも有意差あり。

年齢、性別、独居、教育年数、就労状況、所得、班会参加数を調整因子とし、自粛期間の長さで GDS 改善の有無を多変量解析を行い、自粛期間が 3 ヶ月以上では、GDS 悪化のオッズ比が 1.43 だった。

「考察」

前回調査比べ今回の調査で GDS 点数・状態の悪化を認めた。この結果に大きな影響を与えたのは「活動自粛」の期間の長さであることが推定された。

【お問い合わせ】

東京保健生活協同組合 大泉生協病院

斎藤 文洋

E-mail:fumisaitoh@gmail.com

□ 実践報告

2-8 健康づくり その他

医療機関の地域診断学習会から区内全体の食支援活動へ～つなぐ・に～よん食支援チームの取り組み～

大阪府・大阪市西淀川区医師会 在宅医療・介護連携相談支援室

発表者: 大中 湖月/看護師

共同研究者: 井口 幸子(西淀病院) 野口 愛(西淀病院) 結城 由恵(西淀病院)

キーワード: 地域診断 オーラルフレイル 食支援

【目的】

地域住民・地域の専門職が「食の大切さ」を知り、どの健康レベルでも「口から食べること」の支援を受ける体制を構築する

【背景】

地域診断学習会をきっかけに、地域包括支援センターと在宅医療・介護連携相談支援室が中心となり、多職種でなる「食支援チーム」を立ち上げた。

【方法】

・食支援チームを3つの(A 企画・開発チーム、B 連携チーム、C 啓発、ACP チーム)に分け、効果的に実践することとした

【結果】

- ・口腔内の評価はするが、アセスメントまでは至っていない。
- ・病院や在宅、施設間で共通認識できる食形態の統一ができていない。
- ・ACP にもつなげていく必要がある。
- ・区内の各施設事間の連携を強化する必要がある

【お問い合わせ】

大阪市西淀川区医師会

在宅医療・介護連携相談支援室

大中 湖月

E-mail:

nishiyodo-med6336@pluto.plala.or.jp

□ 実践報告

3-9 健康な職場づくり メンタルヘルス対策

心理職らで行なう新入職員メンタルヘルスケアの実践報告—当法人における過去4年間のデータから—

鳥取県・鳥取医療生活協同組合 鳥取生協病院

発表者：今北 哲平／その他

共同研究者：田治米 佳世（鳥取生協病院）、

池成 早苗（鳥取生協病院）

キーワード：メンタルヘルス、一次予防と二次予防、公認心理師

【目的】

当院で長年実施している新入職員のメンタルヘルスケアについて共有することを目的とする。

【方法】

過去4年間に行なわれた「新入職員メンタルヘルスチェック」において、どのようなサポートがどれくらいの職員に提供されたかを分析した。なお当法人では、入職時に回答してもらったメンタルヘルスに関する質問票をもとに、心理職による面接においてストレスに関する相談や評価を全新入職員に実施しており、必要に応じて追加の個別支援も行なう仕組みとなっている。

【結果と考察】

約25%の新入職員になんらかの直接支援や間接支援が提供されており、不調の未然防止や早期対応、不調者が発生した職場のサポートに寄与していると考えられた。

【お問い合わせ】

鳥取医療生活協同組合 鳥取生協病院

今北 哲平

E-mail: i_teppe188@outlook.jp

□ 実践報告

3-9 健康な職場づくり メンタルヘルス対策

コロナ禍におけるピアサポートの必要性

広島県・広島医療生活協同組合 広島共立病院

発表者：富岡 祐美／保健師

キーワード：コロナ禍、ピアサポート、セルフケア

「目的」当院では、コロナウイルス感染症の流行当初から発熱外来を設立しており、一部の外来看護師が対応していた。対応を継続する中で、看護師の精神的フォローとしてピアサポートの必要性を示し、看護部全体でヘルスプロモーションの介入につなげるため、「方法」2回に分けてアンケートを実施。

「結果・考察」発熱外来の実際を知ること、不安や思いを共有することができたのと同時に一体感を与えてのサポートが不十分であったことが分かった。個人個人の能力、責任感だけでなく、看護部で一体感を持てるように、ピアサポートの風土づくりの活動継続を行い、セルフケアを高めていくことが重要であると考えた。

【お問い合わせ】

広島医療生活協同組合 広島共立病院

富岡 祐美

E-mail: 4FlorWest@hirosimairyu.or.jp

□ 実践報告

3-9 健康な職場づくり メンタルヘルス対策

健康的な職場づくり

広島県・広島医療生活協同組合 広島共立病院

発表者：竹岡 志保／看護師

共同研究者：杉野愛美、福品友袈

キーワード：新卒看護師、ストレス、ヘルスケア

コロナウイルスの影響で、ストレスを発散する場が減り、先輩看護師との交流も減少している。そこで、新卒看護師のヘルスプロモーション、ストレスに注目した。研究方法として、①新卒看護師を対象に昨前年度のアンケート結果から得られた結果を元に先輩看護師との交流方法やストレス対処方法等についての資料を配付②アンケートを実施。③前年度との比較を行った。アンケート結果から、ほとんどの人が何かしらのストレスを感じていることが明確となった。今年度は早期介入により自身のストレス反応を見つめ直し、ストレス軽減に向けてセルフケアを行う機会となったのではないかと考える。

【お問い合わせ】

広島医療生活協同組合 広島共立病院

竹岡 志保

E-mail: kyouritsu@hiroshimairyo.or.jp

□ 研究報告

3-12 健康な職場づくり その他

「ありがとうポスト」によるポジティブアプローチが職員に与える効果について

京都府・公益社団法人京都保健会 京都協立病院

発表者：玉木 千里／医師

共同研究者：福岡智子（京都協立病院）、村山利江（京都協立病院）

キーワード：positive approach、組織開発、職員満足度

背景：当院では感謝の言葉をカードに記載して相手に渡す「ありがとうカード」を活用している。これまで病院幹部しかカードを所持していなかったが、今年度より電子カルテシステムを用いて全職員が利用できるように運用を変更し、「ありがとうポスト」とした（以下「ポスト」とする）。目的：「ポスト」活用状況とその効果を明らかにする。方法：非常勤含む全職員を対象にアンケートを実施。結果：96名（回答率57.1%）が回答。認知度は97.9%。利用者は50%、メッセージをもらった職員は75%。このシステムの評価として10段階中7以上の高評価は75%であった。考察：3/4の職員がメッセージをもらっており、概ね高評価であった。

【お問い合わせ】

公益社団法人京都保健会 京都協立病院

玉木 千里

E-mail: watasihatama@gmail.com

□ 研究報告

3-12 健康な職場づくり その他

HPH 活動が職員の喫煙率や喫煙防止の意識に及ぼす効果

大阪府・淀川勤労者厚生協会 千北診療所

発表者：野口 愛／医師

共同研究者：福島啓（西淀病院 医局）、今村翔太郎（ファミリークリニックなごみ 事務長）

キーワード：職員の禁煙率 KTSND HPH 活動

【目的】

・病院で禁煙のための HPH 活動を行うことで職員の喫煙率が低下するあるいは喫煙防止の意識が改善するかどうかを調べる。

【対象】

・介入群として西淀病院（大阪市、218 床）、みどり病院（岐阜市、99 床）、巨摩共立病院（山梨県南アルプス市、152 床）、川久保病院（岩手県盛岡市、120 床）に依頼した。

・対照群としてくわみず病院（熊本市、100 床）他、5 病院が参加した。

・介入群では、2020 年 1 月～2021 年 3 月に患者・地域・職員を対象にした禁煙のための HPH プログラムを行った。

・研究開始前（2019 年 12 月）と終了時（2021 年 4 月）に喫煙率や加濃式社会的ニコチン依存度調査票（The Kano Test for Social Nicotine Dependence : KTSND）を調査するアンケートを行った。

【結果】

- ・対象：2069 名（男性 508 名、女性 1527 名）
- ・介入群：786 名、対照群：1283 名
- ・配偶者あり：1263 名（61%）、子どもあり：1150 名（56%）
- ・喫煙率：9.9%（開始前）→8.7%（終了後）
- ・回答者全体での喫煙率：10.3%（開始前）→9.3%（終了後）
- ・KTSND 平均：11.8±6.0（開始前）→12.0±5.9（終了後）

【考察】

・病院職員の喫煙率は低下傾向にあるが、非喫煙者も含めた喫煙防止の意識（KTSND スコア）には変化が

見られなかった。

・HPH 活動での介入の有無による差も見られなかった。

・KTSND スコアは、過去の医療従事者を対象にした研究と大きな差はなかった。

・職域での禁煙のための介入について、金銭的なインセンティブをつけると禁煙率が高まるという報告は多い。

・介入前後で効果が見られなかったが、コロナ禍のため予定していた HPH 活動が十分に行えなかったことが影響したと思われる。

【お問い合わせ】

淀川勤労者厚生協会 千北診療所

野口 愛

E-mail: mt22rocky@gmail.com

【2021 年度日本 HPH ネットワーク（J-HPH）ヘルスプロモーション研究助成報告】

□ 研究報告

3-12 健康な職場づくり その他

職員をとした「体重日記」による体重管理に及ぼす研究

岡山県・倉敷医療生活協同組合 水島協同病院

発表者：高田 智恵美／管理栄養士

共同研究者：石部洋一（水島協同病院）、瀧崎朋美（水島協同病院）

キーワード： 職員健診、体重日記、健康維持

「目的」糖尿病をはじめとする生活習慣の患者の割合は年々増加傾向にある。当院職員もヘルスリテラシー向上の為 HPH 活動に取り組んでいる。22 年の職員健診の結果では BMI>25 の肥満の割合は 28.1%であった。そこで、昨年に続き、認知行動療法を取り入れ、職員の肥満の改善、体重維持を目的とした、体重日記記録による、体重変化について検討した。また、健診前プレ企画とし職場単位で体重記録に取り組み参加増を目的にニュースを発行を行ったので合わせて報告する。

「方法」プレ企画・取り組み期間 2022 年 3 月～4 週間・参加人数 21 名。

健診・登録期間 2022 年 4 月～8 月参加人数 14 名。

「結果」☞プレ企画☞対象は男性 5 名、女性 16 名。BMI18.5～25 が 13 名。BMI>25 が 8 名。BMI>25 の 7 名（87.5%）が BMI で 0.5 減少となった。☞健診☞対象は男性 6 名、平均年齢 56.2 才、平均 BMI21.9、女性 8 名、平均年齢 45.3 才、平均 BMI24.3。日記記録者は 1.5 ヶ月の取り組みで、記録なしは 3 ヶ月以上の経過の場合もあった。日記記録者は 8 名（57.1%）。そのうち BMI>25 が 2 名。体重減少が 4 名（50%）。

「考察」☞プレ企画☞は管理栄養士 1 名が 2～3 名の職員を担当し、職場単位で実施。状況確認がしやすく中断が少なかった。参加人数増を目的としたが、健診後の参加者は昨年より減少となった。院内メール配信でのニュースとしては反響があり啓発にはつながったと考えられる。今後の課題として、職場単位での取り組み、取り組み期間中のアプローチ方法、食事量減量だけでなく、「ころ愛ダイエット」と併用しての食事内容への介入を検討していきたい。健診を受診して終わりではなく、簡便な方法で繰り返し取り

組むことで、職員のヘルスリテラシーの向上、または健康維持につながる取り組みとなる様、努めていきたい。

【お問い合わせ】

倉敷医療生活協同組合 水島協同病院

高田 智恵美

E-mail: eiyo@mizukyo.jp

□ 実践報告

3-12 健康な職場づくり その他

HPH 委員会 ニュース発信で HPH 活動をより豊かに

大阪府・淀川勤労者厚生協会ファミリークリニック
あい

発表者：大西 暁子／その他

共同研究者：淀協・ファルマ HPH 委員会

キーワード：ニュース、周知、

2014 年に HPH ネットワーク加入後、様々な取り組みを行ってきた。加入に向けて学習会や議論を重ねてきたが、直接委員会に関わる職員以外への認知度上らず、自分たちの日々の実践のなかにキラッと輝く HPH の実践があることに思い至らなかったり、委員会としての取り組みが周知できなかつたりという悩みがあった。日常的に行っていることの紹介や各事業所・健康友の会での取り組みなど共有し、HPH の取り組みへのハードルが下がるよう、ニュース「よどふあるの友」の発行を始め、職員の意識が変化、活動参加が増えた。

【お問い合わせ】

淀川勤労者厚生協会 ファミリークリニックあい
大西 暁子

E-mail: onishi-akiko@yodokyo.or.jp

□ 実践報告

3-12 健康な職場づくり その他

HPH 活動の見える化を目指して

岡山県・倉敷医療生活協同組合 水島協同病院
発表者：大室 里美／理学療法士

共同研究者：石部洋一、吉井章雅、福田広史、
古谷野愛（水島協同病院）

キーワード：ニュースレター、運動、啓発活動

当院では毎年、職員検診後に運動、肥満、飲酒、喫煙に対するヘルスプロモーション活動を企画し、希望者に対して生活改善の取り組みを実施している。今回、HPH 活動をより身近に感じてもらうために、運動企画において実際に運動内容をどのようにフィードバックしているのか、参加者の成果や感想などをニュースレターにして院内メールで配信し職員への啓発活動を行った。ニュースレター発行期間には参加者に応援の声が寄せられるなど、周知度は向上したと考える。

【お問い合わせ】

倉敷医療生活協同組合 水島協同病院
大室 里美

E-mail: rihak@mizukyo.jp

□ 実践報告

3-12 健康な職場づくり その他

保健師によるブリーフ・インターベンションを用いた飲酒・喫煙の取り組み

岡山県・倉敷医療生活協同組合 水島協同病院

発表者：井上 佳恵／保健師

共同研究者：大崎泰葉 水島協同病院、石部洋一 水島協同病院

キーワード：ブリーフ・インターベンション、飲酒、喫煙

当院の保健師指導に新たな試みとしてブリーフ・インターベンション(以下、BI)導入のため、飲酒または喫煙嗜好職員を対象に BI を行い、技術の向上を図った。

飲酒は AUDIT を用いてアンケート調査を実施。293 名の回収があり、過量飲酒となる 8 点以上、23 名のうち、研究協力の得られた 4 名を対象に BI を実施。そのうち、2 名は BI 前から節酒に取り組む様子が見られた。

禁煙はアンケート調査を実施。喫煙歴のある 39 名のうち、14 名の回収があった。そのうち研究協力の得られた 1 名を対象に Bi を実施。対象者が無関心期であり、情報提供で終了した。

BI を活用することで、短期的、かつ、効率的に会話することが出来たと考える。

【お問い合わせ】

倉敷医療生活協同組合 水島協同病院

井上 佳恵

E-mail:kango@mizukyo.jp

□ 実践報告

5-14 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 SDH に対する実践

親子ホームレスに対しての社会的支援を行って

福岡県・公益社団法人福岡医療団 千鳥橋病院

発表者：瀧崎 加代子／看護師

キーワード：親子ホームレス

事例概要)

救急搬送された A 氏は、2 日前から発熱があったが病院嫌いで様子を見ていた。我慢が出来なくなり、病院へ向かおうと歩いていたら便失禁をしてしまい救急要請。入室時の意識レベル I-3。高熱のためかボーツとしていた。娘によると「膝が悪く歩行はスムーズには出来ない。何年も受診せず、健康診断も受けていない」この時「足が悪いのに何故歩いて病院に行こうとしたのだろう」と頭をよぎった。検査結果はインフルエンザ A 型。帰宅方針となり、娘へ説明すると「あーはい」と歯切れの悪かった。違和感を感じ話を聞くと 1 年前からホームレスであった。生活保護の相談にも行ったが「母は年金額が基準を超えている。私は生活保護の対象ではないと言われた。」娘の言葉より区役所の対応への不信感が覗えた。

健康に影響を与えている背景要因)

○発熱、インフルエンザ A 型

○ホームレス、病院受診および健康診断など健康に対するフォローがされていない

○社会的支援を希望したが断られ、福祉(区役所)に対しての不信感

【SDH にアプローチした内容】

○帰宅では安静を保つ事が困難と予測した。

○MSW 介入、生活保護評価や住居設定の必要性を感じ、医師に入院を提案。

○娘は携帯電話を持っておらず。後日連絡を取るのには困難なため、その場で MSW へ連絡。住居設定および本人・娘の生活保護、医療救助が出来た。

考察)

E R は医師が帰宅判断すればそれで終了ではなく、病院から自宅までどういう手段で帰るのか、安全に辿り着けるのか、帰宅後のフォローとして系列診療所への連絡など、を踏まえて援助を行うのが看護師

かつ民医連職員の役割だと思う。今までも1人で受診された方に関しては、「どうやって帰られますか?」「お金は持ってきていますか?」など気にかけていたが、ご家族と一緒に来院されている方に関しては家族任せになっていた。しかし今回の事例を通して家族が居るから大丈夫ではなく、患者背景には隠されている部分があることに気付かされた。そして、最初に感じた違和感を曖昧にせず解決することが必要だと考えさせられた。あの時にそのまま帰宅していたら、親子はホームレスのままだったと思われる。患者に関してはインフルエンザが悪化し重篤な状態に陥っていたかもしれない。外来という少ない情報の中でも経済的支援ツールを活用し社会支援を行うことが大拙である。

【お問い合わせ】

公益社団法人福岡医療団 千鳥橋病院

瀧崎 加代子

E-mail: 3e-fid.jp

□ 実践報告

5-14SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 SDHに対する実践

届かぬ公助～ソーシャルワーカー介入事例から～

青森県・津軽保健生活協同組合サポートセンター

発表者：工藤 聡子／社会福祉士

協同研究者：三浦暢子、工藤紗耶香、野呂眞耶子、葛西悠名、高木佳那子

キーワード：SDH、公助、早期教育

一般科病院のソーシャルワーカーが介入した複合的な生活課題を抱えている事例を集団で検討し、あるべき公助の在り方について考えることを目的とした。事例検討を「SW介入理由と支援」「生活背景」「届かぬ公助」に分類し行い、公助が届かないことには、本人が公助を求めているので届かないパターンと、公助が必要な支援になっていないため届かないパターンとの2つがあると考えた。そして、SDHについての理解を広めSDHに早期にアプローチできる体制を作り、健康や経済問題に関するリテラシーを高める教育を行い、横のつながりを強化し社会全体でアプローチしていく仕組みを作ることを、これからの公助に求めていきたいと検証した。

【お問い合わせ】

津軽保健生活協同組合サポートセンター

工藤 聡子

E-mail: saposen.kenta@gmail.com

□ 研究報告

5-16 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 貧困対策としての無料低額診療と HPH

無料低額診療事業利用者の実態～レジストリ研究の中間集計～

滋賀県・大阪医科薬科大学/しが健康医療生活協同組合 大阪医科薬科大学/こびらい生協診療所

発表者：西澤 寛貴／医師

共同研究者：西岡大輔（大阪医科薬科大学）

キーワード：無料低額診療事業（無低診）、貧困、レジストリ研究

目的：無料低額診療事業（以下、無低診）のエビデンスは限定的であった。そこで「無料低額診療事業の利用者のレジストリ研究」において全国の利用者の実態を明らかにすることを目的とした。

方法：本レジストリ研究に参加した 50 の無低診医療機関で質問紙調査を行った。2022 年 4 月 1 日～9 月 15 日に 138 人のデータを集計した。

結果：平均年齢は 63.7 歳、男性が 63%だった。63.5% が生活保護基準額以下の所得であった。34%が過去 1 年に 2 回以上の受診控えを経験し、無低診の認知度による受診控えに統計的な有意差はなかった ($p=0.730$)。

考察：無低診の周知だけではなく受診の障壁を取り除く他の戦略が求められる。

【お問い合わせ】

大阪医科薬科大学

西岡 大輔

E-mail: daisuke.nishioka@ompu.ac.jp

□ 研究報告

5-16 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 貧困対策としての無料低額診療と HPH

無料低額診療制度を利用する外来患者のコロナ禍における生活実態調査～コロナ前との比較～

京都府・公益社団法人京都保健会 上京診療所

発表者：若田 哲史／理学療法士

共同研究者：高木幸夫

キーワード：無料低額診療制度、COVID-19、QOL

【目的】

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は社会環境を一変させたが無料低額診療制度（無低診）への影響は十分に検証されていない。今回 COVID-19 の流行前後のデータを比較し、生活の変化とそれに伴う課題を知ることを目的に調査を実施した。

【方法】

無低診利用群、生活保護群、非利用群を対象に患者の基本属性、健康関連 QOL、生活習慣、地域との繋がり、相談相手についてを質問し、感染流行前の 2019 年に集めたデータと比較した。

【結果】

感染流行前と有意差が認められた項目は非利用群で最多であった。

【考察】

無低診、生活保護制度は COVID-19 流行下において生活困窮層を保護する役割のみならず、生活困窮を予防するための一定の役割があることが考えられた。

【お問い合わせ】

公益社団法人京都保健会 上京診療所

若田 哲史

E-mail: satoshiwakata@gmail.com

【2021 年度日本 HPH ネットワーク (J-HPH) ヘルスプロモーション研究助成報告】

□ 実践報告

5-17 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 外国人、難民に対する活動

院内での「やさしい日本語ワークショップ開催」

大阪府・社会医療法人同仁会 耳原総合病院

発表者：角野 佳奈子／事務

共同研究者：耳原総合病院産婦人科小児科スタッフ、関西ろくぶんのご日本語教師の先生方、大阪健康福祉短期大学の留学生と先生方

キーワード：やさしい日本語、外国人、ワークショップ

耳原総合病院では特に外国人の患者さんが多い産婦人科・小児科で「やさしい日本語」ワークショップを開催した。講義の後に、患者への説明を実際に「やさしい日本語」に変換するロールプレイを行い、患者からフィードバックを受けるといったものである。「相手の理解度を確認しながら、出来る限りやさしい日本語を意識して伝えることが大切。」「職場で広めたい。」など今後の診療に活かしたいという感想が多く寄せられた。病院としても今後も継続的に取り組んでいきたい。

【お問い合わせ】

社会医療法人同仁会 耳原総合病院

角野 佳奈子

E-mail:kadono-k@mimihara.or.jp

□ 実践報告

5-17 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 外国人、難民に対する活動

国籍や宗教上の制約(禁止食品)に迅速な対応を行う

福岡県・公益社団法人 福岡医療団 千鳥橋病院

発表者：中嶋 純子／管理栄養士

共同研究者：松元由依、山田千凧、平野摩美、松井彩奈、佐藤理歩、森山史世

キーワード：多国籍化、禁止対応食、業務改善

【目的】入院患者の多国籍化に伴い、宗教等により個別対応が必要となるケースが多い。言葉の壁がある中、より迅速に、正確に食事提供を行うための業務改善を行う。

【現状把握】禁止食品のある外国籍患者は看護師や栄養士による聞き取りを行うが、片言でのコミュニケーションが多く、時間がかかり患者への負担も大きい。

【取組】ピクトグラムや食事の写真を作成し、指差しで禁止食材の確認を行うよう取り組んだ。

【課題】業務手順を画一化し迅速な対応を行うため、さらにフローチャートや対応マニュアルも作成していきたい。

【お問い合わせ】

公益社団法人 福岡医療団 千鳥橋病院

中嶋 純子

E-mail:ey-chidori@fid.jp

□ 実践報告

5-18 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 気候変動に対する活動(グリーンホスピタルの実践など)

診療所における Green Practice の取り組み

滋賀県・しが健康医療生活協同組合

医療生協こうせい駅前診療所

発表者：佐々木 隆史／医師

キーワード：気候変動、GreenPractice、システムチェンジ

欧米の医療界を始め世界医師会も医療者が気候変動に取り組む必要性を訴えて、多くの医療者が活動している。2020～2030年までに人類がどれだけ温室効果ガス排出を抑えられるかが、この2100年の状況を決めるともいわれる。一方日本は臨床医による活動は少ない。筆者は環境先進国イギリス2040年医療界でNET ZEROを宣言NHS下のCentre for Sustainable Healthcareで学びを深め、有志を集めて『みどりのドクターズ』を軸にプライマリ・ケア連合学会等で活動を広めている。掲示ポスターや吸入薬の切り替え、ポリファーマシー削減等の外来での取り組み、往診車の電気自動車への切り替え、職員に対するGreen Practiceの教育、Vegan食の挑戦など、家庭医の強みを活かし活動している当院の取り組みを紹介する。

【お問い合わせ】

しが健康医療生活協同組合

医療生協こうせい駅前診療所

佐々木 隆史

E-mail: sasachon0603@hotmail.com

□ 実践報告

5-19 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 平和とヘルスプロモーション

当院における包括的ヘルスプロモーションの実践

岡山県・倉敷医療生活協同組合

総合病院水島協同病院

発表者：石部 洋一／医師

共同研究者：吉井章雅(水島協同病院)、田中慶子(水島協同病院)、高田智恵美(水島協同病院)、大室里美(水島協同病院)、森田千加子(水島協同病院)、淵崎朋美(水島協同病院)、井上佳恵(水島協同病院)、大崎泰葉(水島協同病院)、垣内春菜(健康事業部 健康づくり課)

キーワード：地域、職場、患者

(はじめに)肥満、栄養、運動、喫煙、飲酒、SDHが基本とし、地域住民、患者、職員に対し当院の包括的活動の一部を報告する。(主な活動)域住民に肥満と運動の改善にパンフレット※を作成し、参加者を募り教育講演などを行っている。患者を対象としSDHを評価し「気になる患者」へ訪問を行っている。職員がネームに禁煙推進シールを貼り禁煙の啓発活動を行っている。職員検診で肥満、栄養、運動、3項目に対し参加者を募りモニタリングを行っている。喫煙、飲酒の2項目については保健師がbrief interventionの準備を始めている。(まとめ)当院の多方面への包括的活動報告を行い、発表を通して情報交換および議論の場としたい。 ※http://www.kura-hcu.jp/hp/health_promotion.html

【お問い合わせ】

倉敷医療生活協同組合 総合病院水島協同病院

石部 洋一

E-mail: ishibe819@gmail.com

□ 実践報告

5-20 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 その他

フードパントリーを通じた見守りづくり

東京都・東京保健生活協同組合 本部

発表者：斎藤 恵子／看護師

共同研究者：白数久明、津久井富造、篠田佐多江、山口弘樹

キーワード： 貧困、支援、見守り

【背景】コロナ感染拡大により、失業などによる生活困窮者の増加。生協組合員より何か支援をしたいという要求の高まり。

【方法】①協議会に実行委員会立ち上げ集団的に取り組む②HPHの視点から食料配布を行い、地域の生活困窮者等に対する継続的な支援を行う③健康相談や、困りごと相談等を行い

他団体と協力して支援の輪を広げる

【結果】①幅広い年齢層が利用②地域、他団体との協力体制確立③組合員の地域を見る意識の変化

【考察】フードパントリーは誰もが立ち寄れる場所になっている。地域の団体とつながることで、生活困窮者だけでなくフードパントリーを通して地域の見守りにつながっている。

【お問い合わせ】

東京保健生活協同組合 本部

斎藤 恵子

E-mail: sosiki@tokyo-health.coop

□ 実践報告

5-20 SDH など社会的課題に対するヘルスプロモーション活動 その他

フードバンクの取り組み

東京都・東京保健生活協同組合 本部

発表者：香取 三恵子／その他

共同研究者：工藤妙子（大泉生協病院）、隈元朋枝（大泉生協病院）、井上ふさ子（東京保健生協理事）、生松まりこ（東京保健生協理事）、井上智史（東京保健生協 本部）

キーワード： 貧困、毎月、地域

【背景】コロナ感染拡大により、失業などによる生活困窮者の増加。他団体の活動に触発され当地域でも始めたいと思った。

【方法】①協議会に実行委員会を立ち上げ集団的に取り組む②HPHの視点から主に食料配布を行い、地域の生活困窮者等に継続的な支援をする③地域の商店・購買生協・社協・福祉事務所・地域包括などと協力して支援

【結果】①幅広い年齢層が利用②地域、他団体との協力体制確立③組合員の地域を見る意識の変化

【考察】フードバンクは実施日だけでなく無料低額診療利用者など、突然の相談にも対応できるようにしている。地域に声をかける事で、新たなつながりが生まれた。フードバンクを通して地域の見守りにつながっている。

【お問い合わせ】

東京保健生活協同組合 本部

香取 三恵子

E-mail: sosiki@tokyo-health.coop

□ 研究報告

6-22 医療の質の向上とヘルスプロモーション活動の「見える化」ヘルスプロモーションのパス作製

AIによるデータドリブンな仮説生成を導入した新たな疫学研究の可能性

大阪公立大学 農学部緑地環境科学科

大塚 芳嵩／大学教員

者：今西純一（大阪公立大学）、那須守（室蘭工業大学）、岩崎寛（千葉大学）

ド：科学の自動化、バイジアンネットワーク、確率的因果関係

セオリー・ドリブン・アプローチによる頻度論（仮説検定）の前提条件は満たされているのか。人間による仮説生成はバイアスがないと言えるのか。本研究は、説明可能 AI を用いたデータ・ドリブン・アプローチによる仮説生成を導入した新たな疫学研究の可能性について提案する。

バイジアンネットワークは、ベイズの定理に基づきビッグデータから人間の主観性を完全に排除した状態で仮説を生成することが可能であり、また要因間の確率的な因果関係をネットワーク状の構造モデルで可視化し、ある要因の条件の変化（介入）によるその他全変数の変化をシミュレートできる。

本研究は、説明可能 AI を用いた新たな疫学研究プロジェクトを紹介する。

【お問い合わせ】

大阪公立大学 農学部緑地環境科学科

大塚 芳嵩

E-mail: y.otsuka@omu.ac.jp

□ 実践報告

6-23 医療の質の向上とヘルスプロモーション活動の「見える化」ヘルスプロモーションと QI

新型コロナ禍における糖尿病合併症診療の自己監査

京都府・公益社団法人京都保健会 ふくちやま協立診療所

発表者：寺本 敬一／医師

キーワード： #糖尿病、#糖尿病合併症管理、#医療の質

目的) 糖尿病の大血管、細小血管合併症診療の自己監査で、管理状況を改善し合併症進行を予防する。

方法) 対象は当院通院の糖尿病患者 36 名。高血圧、脂質管理状況と細小血管合併症（神経障害、網膜症、腎症）の検査、合併症の頻度を調査。

結果) 血圧管理は全例良好。LDL 管理良好は 83.3%。神経障害、網膜症、腎症の合併症検査はそれぞれ 38.9%、30.6%、44.4%が推奨間隔内に実施。神経障害、網膜症、腎症の頻度は、それぞれ 33.3%、6.7%、33.3%。

結論) 当院の糖尿病合併症検査実施は 30-45%。血圧、脂質管理は良好。

考察) 糖尿病合併症検査の実施改善のためにリマインダシステムの構築が必要。

【お問い合わせ】

公益社団法人京都保健会 ふくちやま協立診療所

寺本 敬一

E-mail: ktlovesfootball@gmail.com

□ 実践報告

7-25 その他 HPHのための管理運営

QRコード・グーグルフォームを用いたHPH活動報告の取り組み

大阪府・一般社団法人 大阪ファルマプラン 本部
発表者：橋本 一代／薬剤師

共同研究者：廣田憲威（大阪ファルマプラン）、
前田元也（西淀病院）、野口愛（西淀病院）、松岡美樹
（西淀病院）、結城由恵（西淀病院）

キーワード：HPH活動報告、QRコード、全職員参加

2014年9月から淀川勤労者厚生協会と大阪ファルマプランで、淀協ファルマ HPH 委員会を立ち上げ活動している。

淀協ファルマ HPH 委員会では、職員全員が HPH 活動に参加して欲しいとの思いがあるが、活動を集約する方法がこれまでなかった。そこで、HPH 活動に参加したことを確認する方法について検討し、2021年4月よりQRとグーグルフォームを用い、職員個々が活動報告出来るシステムを作成・運用を開始した。報告状況を確認し、質問項目等を見直し2022年4月から2年目に入った。大人数、広範囲な事業所の集約方法としてQRコード・グーグルフォームを用いることは有用であった。現在いかに職員が HPH 活動に参加し報告数を伸ばしていくかを検討している。

【お問い合わせ】

一般社団法人 大阪ファルマプラン 本部
橋本 一代

E-mail: k-hashimoto@faruma.co.jp

□ 研究報告

7-26 その他

Health Promoting Hospitals -医療機関等におけるヘルスプロモーション活動の実態調査報告

京都府・京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 医療経済学分野

発表者：本田 雄大／理学療法士

共同研究者：佐々木典子(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)、舟越光彦(公益社団法人福岡医療団 千鳥橋病院)、尾形和泰(公益社団法人北海道勤労者医療協会 勤医協札幌病院)、小泉昭夫(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、松原為人(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、吉中丈志(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、中川洋寿(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、中山健夫(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)、近藤尚己(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)、大矢亮(社会医療法人同仁会 耳原総合病院)、伊藤真弘(津軽保健生活協同組合 健生病院)、結城由恵(公益財団法人淀川勤労者厚生協会 附属西淀病院)、福庭勲(医療生協さいたま生活協同組合 埼玉協同病院)、根岸京田(東京保健生活協同組合 蔵前協立診療所)、廣田憲威(一般社団法人 大阪ファルマプラン)、今中雄一(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)

キーワード：Health Promoting Hospitals、実態調査、地域へのアプローチ

【目的・方法】医療機関における広義のヘルスプロモーションの実態や具体的活動を明らかにすることを目的に記名式施設調査を行った。【結果】日本 HPH ネットワーク(J-HPH)に参加している病院では地域へのアプローチで取り組まれている活動種類が多かった。地域へのアプローチの内容として、地域住民向け講演会、患者向け教室、病院祭など多様な取り組みが認められた。【結論】J-HPHに参加している病院や施設で多くの貴重な取り組みが行われているが、対外的に十分に認知されていないため、今後ヘルスプロモーション活動を普及、実践するためには、同活動を病院・医療機関等の重要な機能として位置づけし、見える化していく余地があると考えられる。

【お問い合わせ】

京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学系専攻
医療経済学分野

本田 雄大

E-mail: honda.yudai.52a@st.kyoto-u.ac.jp

□ 研究報告
7-26 その他

医療機関のヘルスプロモーション活動の実際と普及に向けた課題・対策

京都府・京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻

発表者：西下 陽子／大学院生

共同研究者：佐々木典子(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)、本田雄大(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)、舟越光彦(公益社団法人福岡医療団 千鳥橋病院)、尾形和泰(公益社団法人北海道勤労者医療協会 勤医協札幌病院)、小泉昭夫(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、松原為人(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、吉中丈志(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、中川洋寿(公益社団法人京都保健会 京都民医連中央病院)、中山健夫(京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻)、近藤尚己(京都大学大学院 医学研究科社会健康医学系専攻)、大矢亮(社会医療法人同仁会 耳原総合病院)、伊藤真弘(津軽保健生活協同組合 健生病院)、結城由恵(公益財団法人淀川勤労者厚生協会 附属西淀病院)、福庭勲(医療生協さいたま生活協同組合 埼玉協同病院)、根岸京田(東京保健生活協同組合 蔵前協立診療所)、廣田憲威(一般社団法人 大阪ファルマプラン)、今中雄一(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻)

キーワード：ヘルスプロモーション活動、2020年版 HPH 基準、普及

国内で行われているヘルスプロモーション活動の具体的内容を明らかにし、普及に向けた課題と対策を検討することを目的として、日本 HPH ネットワーク参加機関を対象として記名式施設調査を実施した。2020年版 HPH 基準を参考に調査結果を内容分析した。活動の具体的内容として、地域住民との交流促進、社会的弱者を制度・専門機関に繋ぐ/制度の隙間を埋める活動や職場環境改善への取り組みが行われていることが明らかになった。活動が各種医療機関に普及しにくい理由として、認知度が低いこと、資金、時間、人手の不足、成果が見えにくいこと等が挙げられ、対策として資源の再配分、政策的支援の獲得、費用と効果のエビデンスの可視化が重要と考えられた。

【お問い合わせ】

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻

西下 陽子

E-mail:nishishita.yoko.26f@st.kyoto-u.ac.jp

□ 実践報告
7-26 その他

リハビリテーション科における SDH の取り組みについて～SDH の取り組みの変遷と成果, 今後の展望について～

青森県・津軽保健生活協同組合 健生病院

発表者：小山内 奈津美／言語聴覚士

共同研究者：二本柳美里, 小野恵裕, 一戸広大(津軽保健生活協同組合・健生病院 リハビリテーション科)

キーワード：SDH 教育、職場教育

【背景・目的】当院リハビリテーション科では、2014年よりセラピストの SDH 教育に取り組んでいる。取り組みの成果と今後の展望について報告する。【取り組み】2014年から段階的に SDH 教育を開始し、2021年に SDH の実践報告会を実施した。【結果】取り組み後、スタッフの SDH への関心・意識は向上し、SDH の視点を活かした支援が日常業務の中で実践された。実践の成果として「SDH 事例集」を作成した。健康増進や介護予防を担うセラピストにおいて、SDH 教育は有用であり、職場内での実践を地域活動に結びつけていく事が今後必要と考える。

【お問い合わせ】

津軽保健生活協同組合 健生病院

小山内 奈津美

E-mail: stkensei@yaoo.co.jp

□ 実践報告

7-26 その他

HPH 産婦人科に勤務する助産師が取り組む性教育～
オンライン開催による活動再開～

埼玉県・医療生協さいたま 埼玉協同病院

発表者：村井 佳美／助産師

共同研究者：木田橋知里（埼玉協同病院）

キーワード：助産師、性教育、オンライン

【背景・目的】助産師は、女性の健康の保持・増進を促し、健康をめぐるさまざまな問題に女性に対処できるよう支援する役割を持つ。当院は、有志の助産師による性教育活動を行っていたが、COVID-19 拡大により活動の中止を余儀なくされた。今年度、オンライン開催により活動再開が実現した。【活動の概要（方法・結果）】学童の部・思春期の部の2部構成にて開催した。合計 20 名の子どもが参加し、好評を得た。

【考察】オンライン開催であっても、参加者の反応を得られ、伝えなかったことが伝えられた手ごたえを感じた。今後は、生殖・リスク・疾病についての教育にとどまらない包括的セクシュアリティ教育への発展に向け学習と経験を重ねていきたい。

【お問い合わせ】

医療生協さいたま 埼玉協同病院

村井 佳美

E-mail: inochi@mcp-saitama.or.jp

□ 実践報告

7-26 その他

地域で繋がり、顔の見えるまちづくりの実現

埼玉県・医療生協さいたま生活協同組合 深谷生協
訪問看護ステーション

発表者：永躰千春／看護師

「目的」在宅看取り、精神科訪問看護、お悔み訪問を通して見守り、自立支援の場や機会が必要だと感じた。

「方法」実践報告

「結果」多職種顔の見える関係で家族ケアを行う事で、地域医療を円滑にすすめることができる。

「考察」医療生協さいたまには気がかりのバトンの受け手がたくさんいる。支え合いのまちづくりを目指し、バトンをつないでいく。

【お問い合わせ】

医療生協さいたま生活協同組合

深谷生協訪問看護ステーション

永躰 千春

E-mail: f-houkan.kango@mcp-saitama.or.jp